論　文

ひきこもりの長期・高年齢化要因に関する質的分析
－自由記述回答のテキストマイニング－

矢ヶ部陽一

（西九州大学大学院生活支援学研究科　博士後期課程）

（2022年１月11日受理）

Factor Analysis of Prolonged Aging about Hikikomori:
Analysis of Free Description by Text Mining

Youichi YAKABE

Nishikyushu University Graduate school of Human Care Sciences

（Accepted: January 11，2022）

Abstract

This study aims to investigate the factors of prolonged aging of hikikomori based on the free descriptions of supporters. We requested the 404 support organization by mail, 244 people (12.1%) responded. The free descriptions were analyzed using text mining. Three appearance patterns were identified through the co-occurrence network, Addition, correspondence analysis confirmed, two characteristic patterns. Two aspects of hikikomori were considered personal and social factors.

キーワード：ひきこもり、長期・高齢化、自由記述回答、テキストマイニング

Key word：Hikikomori, Prolonged aging, Free description, Text mining

Ⅰ．はじめに

ひきこもり研究の第１人者である精神科医の斎藤環[1)]は、ひきこもりの高齢化の要因として、ひきこもりの初発年齢の上昇、そしてひきこもりの長期化が背景にあると指摘している（斎藤 2020：24-28）。

ひきこもりの全国実態調査である直近の平成30年度全国調査（内閣府 2018）と前回の平成27年度全国調査（内閣府 2015）を比較してみると、ひきこもりの初発年齢は15歳から24歳までの若年層の割合が約65％から約15％に減少し、全年齢層に分布する変化がみられる。さらに、40歳以上の中高年齢期の割合が約57％となっている。また、ひきこもり状態になってからの期間は、７年以上の者の割合が約35％から約51％に上昇しており、ひきこもりの長期化と高齢化の様相を示している。このように、実数的にも明らかにひきこもりにある人々の長期化と高齢化は進展しているといえるであろう。

原田（2020：36）は、中高年化するひきこもり状態の特徴として、ひとつは学齢期にひきこもりになりそのまま継続している傾向があり、もうひとつは就労後の職場の人間関係や退職などを契機とする傾向があると述べている。昨今では、後者の中高年齢期に移行してからひきこもりに陥ってしまう社会的状況にあると考えられる。

また、同様に8050問題といわれる80歳代の親とひきこもりである50歳代の子の家庭の存在も社会問題化している。ひきこもりを抱える家族について、川北（2020：349）は「ひきこもりを恥とする意識、本人との関係悪化のリスク、相談支援の不十分さなどから家族による積極的相談は難しい」とひきこもり問題の性質を示している。他方で、相談窓口への調査からは、ひきこもり支援の困難性として「支援に時間を有する、状態像の多様さ、本人が問題を感じていない、家族が支援を受けることに消極的」なこと等が挙げられている（川北 2019：131-132）。先のひきこもり実態調査による傾向からみても、今後さらなる地域的課題となることが危惧される。

しかしながら、近年になって長期・高齢化の実態が明らかになったこともあり、その要因についての分析はまだ取り組まれはじめられたばかりで実証的な研究はあまり見当たらない。ひきこもり状態にある人々の地域ケアの観点からも、なぜひきこもりの初発年齢の上昇や長期化が進展しているのかという社会的要因の解明が求められる。

Ⅱ．研究目的

本研究では、実践現場に携わる支援者の自由記述回答からひきこもりの長期化と高齢化の背景要因について分析する。自由記述の質的分析をとおしてその要因を検討する。

Ⅲ．研究方法

１．調査対象

自由記述回答の対象は、ひきこもりの市町村圏域の支援機関である「生活困窮者自立相談支援機関」と都道府県圏域のひきこもり支援機関である「ひきこもり地域支援センター」の従事者とした。

単純無作為抽出にて全国1,316生活困窮者自立相談支援機関の４分の１の329ヵ所を抽出し、同機関所属の相談員等に回答を求めた。さらに、全国75ヵ所のひきこもり地域支援センターに配置されているひきこもり支援コーディネーターに回答を依頼した。送付した支援機関は404ヵ所、１機関平均５名程度として合計2,020名分であった。

調査対象者には、自由記述の回答として「ひきこもりの中高年齢化の理由や背景について、支援者として考えることを記述してください」と依頼した。その結果、244名（12.1％）より回答を得た。

２．分析方法

自由記述回答のテキストマイニングにおいては、樋口（2014）が開発した「KH Coder３」による計量テキスト分析を行った。

同分析法は量的側面と質的側面を接合したアプローチであり、質的データ分析にあたり、分析者の問題意識の影響を極力受けない形で要約、提示できる特徴をもつ（樋口 2014：19）。自由記述回答を分析するうえで、従来の内容分析に比してもより妥当性ある客観的な方法だと考えた。

本稿では、共起の程度が強い語を線で結び、出現パターンの似通った語を分析する共起ネットワーク、並びに２次元の散布図を用いて、また別の角度から出現パターンの傾向を探索する対応分析を試みた（樋口 2014：150-157）。

３．用語の操作的定義

本稿ではひきこもりの定義として、厚生労働省ガイドラインである「様々な要因の結果として社会参加を回避し原則的には６ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態」（齋藤 2010）としている。ただし、本研究では同定義を用いるが、ただし調査回答者がひきこもり期間が６ヶ月未満であっても、様々な要因結果としてひきこもり状態が顕著であると判断すれば同定義の範疇とする。

4．倫理的配慮

本調査は、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守している。自由記述は無記名自記式であり、回答は任意であることを文章で説明したうえで回答を依頼した。なお、西九州大学倫理委員会の審査を得た（承認番号19KFM32）。

Ⅳ．結　　果

1．自由記述の回答者属性

自由記述の回答者244名の属性として、表１と表２のとおりであった。

単一回答として、性別は男性83名（34.0%）、女性161名(66.0%)であった。年齢は、40歳代の65名(26.6%)、50歳代の63名（25.8%）にて約半数を占めている。最終学歴は、４年制大学が133名（54.5%）と最も高い割合である。専門職経験の年数は、10年以上が95名(38.9%)であるのに比して、３年未満54名（22.1%）の割合も高くばらつきがある。また、現職の担当年数は、５年以上の割合が74名（30.3%）と割合が高いが、これも各年数にばらつきがある。40歳以上のひきこもり事例数は５ケース未満が159名（65.2%）であり、全体の約３分の１を占めていた。

表１　回答者の属性（単一回答）　N＝244

（単一回答）	カテゴリー	度数（%）
性別	男性	83（34.0%）
	女性	161（66.0%）
年齢	20代	19（ 7.8%）
	30代	52（21.3%）
	40代	65（26.7%）
	50代	63（25.8%）
	60代以上	44（18.0%）
	無回答	1（ 0.4%）
最終学歴	専門学校	29（11.9%）
	短期大学	25（10.2%）
	４年制大学	133（54.5%）
	大学院	28（11.5%）
	その他	29（11.9%）
専門職経験年数	３年未満	54（22.1%）
	３～４年	35（14.4%）
	５年～９年	52（21.3%）
	10年以上	95（38.9%）
	無回答	8（ 3.3%）
現職務の担当年数	１年未満	34（13.9%）
	１～２年	67（27.5%）
	３～４年	65（26.6%）
	５年以上	74（30.3%）
	無回答	4（ 1.6%）
担当する40歳以上のひきこもり事例数	５ケース未満	159（65.2%）
	５～９ケース	46（18.9%）
	10～14ケース	11（ 4.5%）
	15ケース以上	23（ 9.4%）
	無回答	5（ 2.0%）

表２　回答者の属性（複数回答）　N＝244

（複数回答）	カテゴリー	度数（%）
職種	相談員	182（74.6%）
	就労支援員	38（15.6%）
	心理士	21（ 8.6%）
	その他	19（ 7.8%）
基礎資格	社会福祉士	82（33.6%）
	精神保健福祉士	46（18.9%）
	公認心理師	19（ 7.8%）
	臨床心理士	21（ 8.6%）
	保健師	15（ 6.1%）
	介護支援専門員	35（14.3%）
	相談支援専門員	17（ 7.0%）
	その他	
	（その他の主な内訳）	
	社会福祉主事	13（ 5.3%）
	キャリアコンサルタント	6（ 2.5%）
	教員免許	6（ 2.5%）
	看護師	5（ 2.0%）
	介護福祉士	5（ 2.0%）
	無回答	45（18.4%）

※上記は、複数回答であるため回答総数は一致しない

また、複数回答として、職種は相談員182名(74.6%)が最も高い割合となっており、次いで就労支援員38（15.6%）である。基礎資格は、社会福祉士82名（33.6%）、精神保健福祉士46名（18.9%）の割合が高く、次いで介護支援専門員35（14.3%）であった。

2．自由記述回答の頻出語

244名の自由回答記述について、頻出100語[2)]を表３に示した。なお、頻出語の意味解釈にあたっては、頻出語のデータ一覧を参照し、該当する頻出語の前後の文脈をひとつずつ読み込んで判断した。

上位10の頻出語は、「支援」197から「関係」77までであった。支援者の行為を表す頻出語を除いて、「支援」197、「家族」163、「社会」136、「相談」86、「家族」77というひきこもりの緩和に向けての中核的なキーワードが並んでいる。支援専門職の視点からは、ひきこもりである人のみではなく、いかに周囲の家族に対して社会でサポートしていくことが重点化されているかが表されている。

次に上位20の頻出語は、「人」73から「理解」51までであった。支援者の行為を表す頻出語として、「考える」69、「必要」69、「難しい」51が考えられ、ひきこもり問題の困難性が表されている。また、「人」73、「ケース」64、「問題」58、「就労」56、「生活」51、「理解」51等の頻出語は、その困難性を表す語句としても捉えられる。

上位30から50の頻出語は、「長期」47から「出る」20までであった[3)]。ひきこもりの特性を表すと考えられる頻出語として、「長期」47、「障害」40、「発達」34、「精

表３　自由記述回答の頻出100語

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
支援	197	当事者	33	コミュニケーション	20	年金	14
家族	163	年齢	32	出る	20	抱える	14
思う	157	対応	31	居場所	19	影響	13
社会	136	高齢	29	経済	19	外	13
本人	132	状態	29	要因	19	期間	13
多い	100	自分	28	機会	18	求める	13
親	98	中高年	28	時間	18	傾向	13
感じる	86	環境	27	連携	18	結果	13
相談	86	困難	27	学校	17	現在	13
関係	77	理由	27	経験	17	資源	13
人	73	仕事	26	孤立	17	自己	13
考える	69	就職	26	疾患	17	世代	13
必要	69	少ない	25	状況	17	続く	13
ケース	64	今	24	得る	17	低い	13
問題	58	解決	23	関わり	16	体制	12
就労	56	困る	23	原因	16	大きい	12
機関	54	周囲	23	長い	16	意識	11
生活	51	様々	23	特性	16	介護	11
難しい	51	子ども	22	家庭	15	見える	11
理解	51	自立	22	子	15	失敗	11
長期	47	職場	22	自身	15	場	11
障害	40	不足	22	不安	15	情報	11
背景	40	課題	21	医療	14	世帯	11
地域	34	場合	21	関わる	14	体験	11
発達	34	人間	21	強い	14		
精神	33	働く	21	生きる	14		

神」33、「年齢」32、「高齢」29、「中高年」28、「環境」27、「困難」27、「仕事」26、「就職」26、「職場」22、「コミュニケーション」20等が挙げられる。いずれも近年のひきこもり状態の性質や課題を表す語句であり、実践現場での支援の困難性が示されている。

以上のように、頻出語においては、ひきこもりの支援の要点や展開、そしてその困難性、またひきこもりの性質や要因を表す語句が上位に出現していた。

３．頻出語の共起ネットワーク

図１の共起ネットワークは、共起関係を円で囲われた頻出語とその頻出語間を結びつける線で構成されている。頻出語の数に応じて円の大小を表し、また線の太さに応じて共起関係の強さを表している。

本調査による頻出語の共起ネットワークでは、点線で囲ったように３つの出現パターンが確認された。１つ目の出現パターンは、「支援」、「家族」、「本人」を取り巻く支援展開を表している共起関係である。これら３つの頻出語相互の結びつきに加え、「支援」には「相談」、「難しい」、「関係」、「必要」、「機関」等の結びつきがみられた。また、「家族」には「関係」、「考える」、「親」、「社会」、「多い」等が結びついていた。「本人」には「社会」「多い」、「感じる」等の結びつきがあった。特に、「支援」、「家族」、「本人」を取り巻く共起関係をみたとき、「関係」や「相談」、「社会」、「生活」という頻出語が支援を展開していくうえで重要なファクターであることが推察される。

２つ目の出現パターンは、「発達」、「特性」、「困難」、「障害」、「精神」、「疾患」等の結びつきによるひきこもり本人の困難さを表す共起関係である。従前より特に青年期のひきこもりにおいて、発達障害や精神障害との関連は指摘されてきた(近藤 2014)。時間の経過とともに、そのような特性がある人々の高年齢化は必然であろう。ここでは、ひきこもりである人の性質として、発達障害

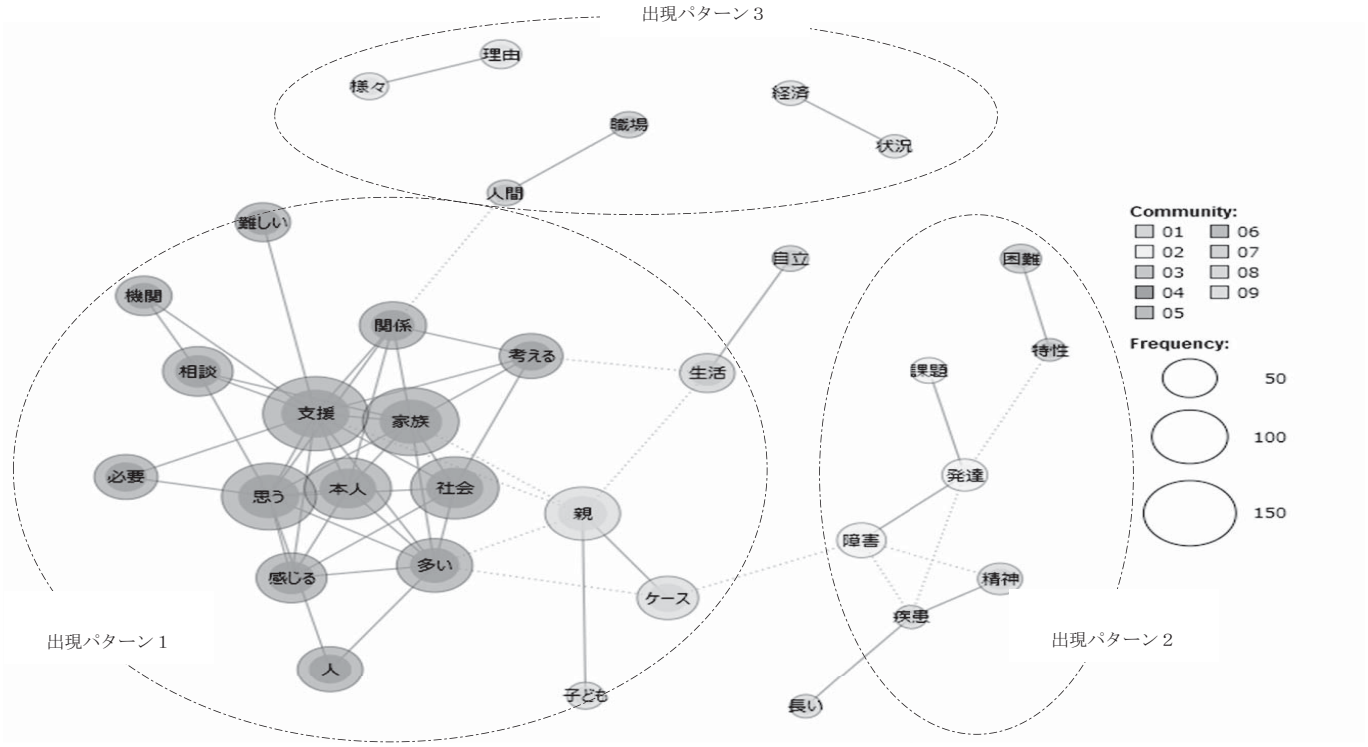

図１　自由記述回答による頻出語の共起ネットワーク

や精神障害の関連性があることが示されている。

３つ目の出現パターンは、共起ネットワークの外縁に位置する頻出語である「経済」と「状況」、「人間」と「職場」、「理由」と「様々」の結びつきによる共起関係である。これらは、ひきこもりである人の環境因子の共起関係を表す頻出語であることが考えられた。

４．頻出語の対応分析

対応分析は、「出現パターンに取り立てて特徴のない語が、原点（0,0）の付近にプロットされる」と解される（樋口 2018：42）。他方で、原点から離れてプロットされている程、特徴的な語になるというように解釈される。

本調査による頻出語の対応分析においては、図２で示すとおり、右上部にプロットされる「地域ひきこもりセンター」による自由記述の頻出語、対称として左下部にプロットされる「自立相談支援機関」による自由記述の頻出語の２軸で構成されている。同２軸の対応分析として、主に点線で囲ったように２つの出現パターンが示された。

出現パターンについての特徴のひとつは、最も右上にプロットされた「特性」と「発達」、そして「自身」と「経験」という頻出語である。また続けて、右上部には「障害」、「疾病」、「中高年」、「不安」、「当事者」、「コミュニケーション」等の頻出語がプロットされている。表５はこれらの頻出語の自由記述を示したものであり、ひきこもりである本人の性質を表しているものといえるであろう。ひきこもりの個人的要因を示しているものと捉えることができる。

もうひとつの特徴は、最も左下にプロットされた「機会」と「子」、そして「課題」、「居場所」、「連携」、「生活」という頻出語である。また続けて、左下部には「原因」、「経済」、「時間」、「自立」等の頻出語がプロットされている。表６はこれらの頻出語の自由記述を示したものであり、ひもりこもりである人を取り巻いている状況や環境を表しているものといえる。つまり、ひきこもりの社会的要因を示しているもの捉えることができる。

このように対応分析においては、ひきこもり要因として大きく分けて個人的要因と社会的要因の２つの特徴が考えられた。加えて、ひきこもり支援の機関的特性として、「地域ひきこもり支援センター」は主にひきこもりの個人的要因について着目することが多く、一方で「自立相談支援機関」は主にひきこもりの社会的要因に着目していることが推察された。

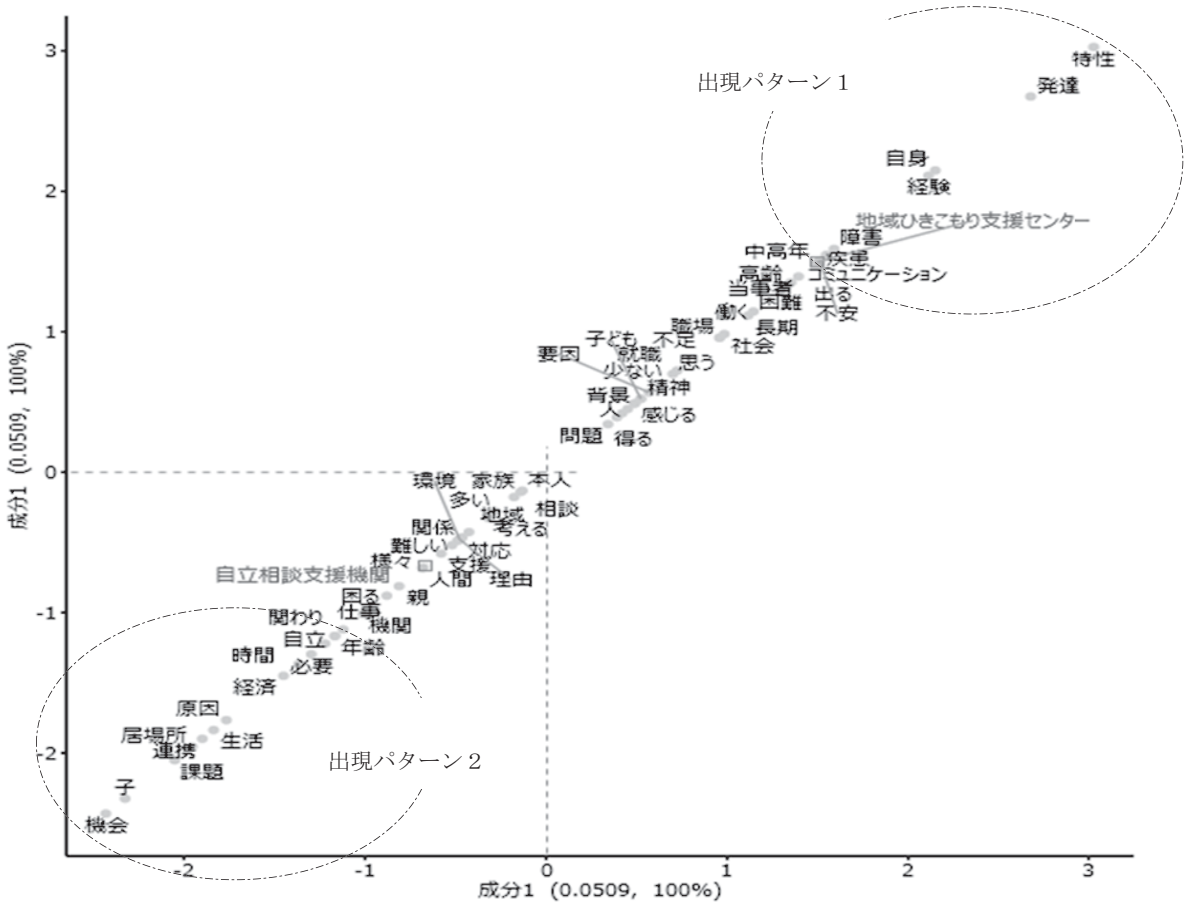

図２　自由記述回答による頻出語の対応分析

表４　対応分析による頻出語の自由記述（出現パターン１）

頻出語	出現パターン１の自由記述例（一部抜粋）
特性	就労への意識を本人が持っていても、特性的な課題（不安感、こだわり、強迫的行為）が多く理解ある就労先やボランティアがない。 もともとコミュニケーションの苦手さ等、発達特性を持つ方は一定数いると感じる。 失敗体験が本人の特性と相まって、現在にも続いていると考えている。
発達	就労できなかったり、就労しても続けることができず、ひきこもりようになるが背景には発達障害や精神疾患がある。 その更に背景には、うつ病、知的障害、発達障害等を抱えていると思った。 発達障害が根底にある人も多い。
自身	本人自身が相談の場に来ることはほんどないため、家族が動くしかない。 40代～60代の人達が社会や自身に絶望し、自分から心を閉ざし、とじこもってしまっているように感じる。 不登校の経験がある方やご自身が理解していない病気が隠れていることが多い。
経験	不登校やいじめを経験したり、人間関係がうまくいかずに離職後、そのまま社会から距離を置くようになったケースが散見される。 本人が抱える困難さへの理解が得られなかった経験が積み重なると、支援というものへの信頼が失われてしまうのではないかと思う。 失敗経験が重なったことで、次の就労や社会参加につながりにくくなっているケースが多い印象。

※下線部は、頻出語を示している。

表５　対応分析による頻出語の自由記述（出現パターン２）

頻出語	出現パターン２の自由記述例（一部抜粋）
機会	若い頃から就労の機会が持てなかったり、人との関係が築けなかったり、早期に何かにつながりが持てていればと考える。 家族間にある慣習やコミュニケーションを修正するといった発想や機会をもたないことが、より深刻に困難なものにしていると考える。 近所付き合いが減り、恥をかく機会が少なくなり現状維持になってしまっている。
子	近所の目を気にして、なおいっそう働けない子たちにプレッシャーや圧力をかける。 親が子の障害を隠してきたことにも原因がありそうである。 母と子の共依存関係、母親自身の発達的課題、両親間の関係性の歪みがみられる。
課題	経済的な問題を抱えている等課題が複雑であるため、各機関が自分の担当ではないと押し付けあう状況が少なからずあるのではと思う。 70～80歳位に親がなり、経済的にも肉体的にも支援が難しくなって何らかのきっかけで課題が表面化していく。 長期間ひきこもりになっている方は、多数の解決できていない課題があると思う。
居場所	社会資源がほとんどなく、ひきこもりの方がいても居場所がない。 居場所があれば、そこで同じような人間と関わり合い、流れが変わる時があるかもしれない。 ひきこもりの長期化を防ぐためにも、地域の理解や本人の居場所が必要だと感じる。

※下線部は、頻出語を示している。

Ⅴ．考　　察

わが国においてひきこもり本人を対象とした実証的研究が少ないなかで、小橋（2020：44-45）は、親和群を含むひきこもりの背景要因についてのレビューを行い、「不登校の経験が大きく影響していること、思春期や青年期にひきこもりに陥りやすくなることが考える一方で、幅広い年代からひきこもりに陥る可能性があるため、中年期以降のひきこもりについての検討も望まれる」と指摘している。また、個人的背景については、「対人的関係の問題」が示唆されており、環境的背景については「周囲から受けいれられるか否か」が重要であると述べている。

本調査によるひきこもりの長期化と高齢化の要因を問うた自由記述回答のテキストマイニングにおいても、主に個人的要因と社会的要因の２要因の抽出が確認された。計量テキスト分析による頻出語の共起ネットワークと対応分析からは、個人的要因として発達障害や特性、そして精神疾患や障害との関連性が推測され、また社会的要因については、経済や職場状況、また地域や生活環境の関連性が推測された。

ひきこもりの評価については、2010（平成11）年の厚生労働省による「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」においても、第１軸から第６軸までの多軸評価が示されている。しかし、その対象は若年層を想定していたもので、多軸評価の内容としても「背景にある精神障害（発達障害とパーソナリティ障害も含む）」を中核とするものであった。第５軸「環境の評価」は社会的要因となるが、先行研究においては家族関係を除き同軸にはあまり着目されてこなかった。昨今、長期・高齢化の実態が明るみになり、事例的に職場や生活環境との関連が指摘されるようになってきたといえる。

このようなひきこもり研究の変遷を踏まえ、長期化・高齢化するひきこもりの生活問題について、若年層と中高年齢層との比較をとおして、対人関係による挫折や傷つき等の影響による心理的問題とともに、家族関係、経済的自立、職業的役割の葛藤や齟齬に伴う社会的問題が生じることを述べた。（矢ヶ部 2019）。今後は事象としてのひきこもり評価にあたって、環境的・社会的な側面、すなわち小橋（2020：44-45）がいう「周囲から受けいれられているか否か」の具体的要因を解明してくことがひとつの鍵になってくるであろう。

本調査による自由記述回答の分析においては、ひきこもりの長期化・高齢化の要因として、個人的側面である発達障害や精神障害等の存在に加えて、地域生活として経済的問題や職場状況、家族関係等の環境要因との関連があることが示唆された。

Ⅵ. おわりに

本稿では、ひきこもりの実践現場に日々携わる専門職への自由回答記述のテキストマイニングをとおして、ひきこもりの長期化と高齢化の要因について検討を行った。現在、わが国の地域課題として生起しているひきこもりの実態を改めて支援実践による質的側面から確認することができた。

しかしながら、従来より指摘されてきたひきこもり要因の実態的な検証に留まり、その関連を示す構造やメカニズムについては明らかにできていない。今後は、本研究での示唆を他の中高年齢期ひきこもり研究の分析成果も加えて新たな知見として検証できるようにすることが課題である。

注

1）同氏は、1998（平成10）年に『社会的ひきこもり　終わらない思春期』の著作にて、社会的ひきこもりという言葉を用いわが国におけるひきこもり概念の社会的理解を確立した。また、ひきこもりをシステムとして捉え、個人・家族・社会のストレス関係によるひきこもり形成のメカニズムを提示することで、その後のひきこもり援助や支援モデルとされている。

2）自由回答記述の頻出上位100語については、同じ出現回数の頻出語も含めている。そのため、表３は総計102の頻出語となる。

3）上記と同様に、同じ出現回数の頻出語を含めている。

付記

本論は、自由記述回答の質的分析である。本調査において、他に設けた質問項目による量的分析の報告については、本論とは異なる研究目的や対象、分析方法を設定しまとめる予定である。

謝辞

本調査は、2020年度明治安田こころの健康財団による研究助成を受けている。また、業務多忙のなか、質問紙の自由記述に回答頂いた生活困窮者自立支援相談機関、ひきこもり地域支援センターの従事者の方々に深くお礼を申し上げる。

引用文献

原田　豊（2020）「地域精神保健の現場からみたひきこもりの現状と課題－8050問題の本質を考える」『こころの科学』212，35-39.

樋口耕一（2018）『社会調査のための計量テキスト分析　内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシア出版.

川北　稔（2019）「ひきこもり状態にある人の高年齢化と『8050問題』生活困窮者相談窓口の調査結果から」『愛知教育大学研究報告人文・社会科学編』68，125-133.

川北　稔（2020）「長期化するひきこもり事例の親のメンタルヘルスと支援」『精神科治療学』35(4)，349-353.

小橋亮介（2020）「国内外におけるひきこもりに関する概念の整理および研究の動向と今後の課題」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　心理発達科学』66，41-51.

近藤直司(2014)「発達障害を背景とするひきこもりケースについて」『臨床心理学』14(1)，36-40.

内閣府（2016）『若者の生活に関する調査報告書』（https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html，2021.10.15）.

内閣府（2019）『生活状況に関する調査報告書』（https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h30/pdf-index.html，2021.10.15）.

齊藤　万比古・宇佐美政英・早川　洋・ほか(2010)『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』2007－2009年厚生労働科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究（主任研究者　齊藤万比古）」報告書.

斎藤　環（2020）『中高年ひきこもり』幻冬舎新書.

矢ヶ部陽一（2019）「長期・高齢化傾向にあるひきこもりの生活問題についての一考察－ソーシャルワーク実践の視点による検討－」『中九州短期大学論叢』41(2)，61-75.